

保育の原点を探る

倉橋物三「保育法」講義録(三)

記録

田村 薫

菊池ふじの

土屋

とく編

一号記載

第一章 幼稚園

第一節 幼稚園の目的 第二節 学齡前の教育 第三節 保育の意義

第二章 保育方法の原理

一、自発性 二、具体性——幼児生活の特色と生活原理

二号記載

保育方法の原理 つづき

### 第三章 保育法の原則

#### 一、間接（教育）の原則 二、相互教育の原則 三、共鳴の原則 四、生活に依る誘導の原則

### 第四章 保育方案

保育の原理、原則を基として、実際に入る。

目的的实际とも言おうか。

計画上の仕組みの上の實際が、保育方案である。幼稚園で全体的に、計画する案を立てる。それが保育方案なのである。

#### I、保育項目という事を考える。

根本から見れば保育方案は、全て保育の目的から発している事は、言うまでもない。

我々の日常生活は、人生の目的のためになされている事は言うまでもないが、それ程にまで根本に遡ることなしに考えれば、實際は日常の生活は仕事の為になされている。

保育も同様で幼稚園の方案は、実際には、その仕事の為になされている。

そのため保育項目が定められているのである。幼稚園の方案を目的から考えるのではなくて、保育項目から考えられている事は、確かである。故に保育方案を考える為には、保育項目を研究せねばならぬ。

保育項目を見ると、如何にも幼稚園と云うものが、その様な仕事をする為にあるという様な傾向がある。

同様にして小学校も、児童心身の為の目的が定まっているにも拘わらず、それが漠然としている故に、恰も学科を配する為に小学校がある様に考えられる。

少なくとも保育方案を立てるに於いて、保育項目にとらわれ易い弊が起こり易い。この点が、現代幼稚園の方案上の誤りの主なものである。項目あつての幼稚園のように感じている。

## 項目

手技、談話、観察、遊戯、唱歌、

保育項目の本質とは、

子供の生活の中、最も本質の現れているところの、遊  
びの中に本来含まれているもので、教育者が教育の目的  
の為、取り出して来たものではない。

手技、談話、観察、遊戯、唱歌、等堅苦しく云うが、  
本質から立ち割って見れば、子供の生活の中には入って  
いるものである。

小学校の学課目も、その本は生活から来たものではあ  
るが、その学課目の必要を認めて課するのである。

社会には文化というものあり、学問（科学）芸術があ  
る。その中から子供の前へ、学課として取り出して課す  
るのである。が、保育項目は文化から持ち出して来るの  
ではない。

幼稚園の唱歌と云うものは、文化価値として持って来  
るよりも、子供自身の中で自ら歌っているから歌わせて  
いる。

自然の生活を、そのまま持って来る事が大切。斯く考  
えれば、保育方案も考えざるを得ない。文化中から持ち  
出すのなら、学校にも似た幼稚園が出来る。

そもそも幼稚園の開始者フレイベルは、この精神を多  
分に持っていたから、その名に「学校」という文字を用  
い度くなく、様々に考え、考えた揚げ句、キンダーガー  
デンと名付けたのである。

子供の生活する場所を箱とも、寺とも、況してや学校  
としたくない。

庭として自ら伸びゆく種を蒔いて、園丁の保母が伸び  
させてゆく、それが幼稚園である。

学校は文化を持って来て教えるのであり、幼稚園は彼  
等の生活をさせるのである。

故に、保育方案は、全く子供の生活をして出来る限  
り、發揮させる様にとめることが大切である。

保育方案の根本となるものは、幼稚園令に定められて  
はいるが、方案の根本は項目にあらず。フレイベルは且  
つて、「幼き子を集め、自己活動を尊重し、遊戯に依り

幼児を教育する場所」と云ったことがある。

幼児をして十分に生活せしむる方案が欲しい。先ず第一に、幼児の生活を十分に發揮せしむる前に、妨げない様にする。他の目的で、どれ程よき方案であっても、此に違っているものは除かねばならぬ。

幼児の生活を十分に發揮させる為には、生活を妨げぬ為には、

1、幼稚園生活の全体を通じて自由と云う事が相当に許されねばならぬ。

自由をも更に考えねばならぬ。

自由主義、自由教育と云う語が、真面目に理論的にも用いられている。

自由とは本当は如何なるものか分からぬ。単に不自由の反対であつて、不自由の除かれたものを云つたものである。

自由とは、無限の永久の魅力を有するものではないが、相当にしばられた中にも自由がある。自由感はある

ものである。往々にして、感じる、その自由感と云うものを、豊かに感ぜしむる様にする事が肝要。

殊に狭い部屋の中で、きちきちした生活の中であつても、全体を支配する気持ちか自由感を感じられるか、圧迫感を感じられるかに分かつた。

教育は此方の計画をもつてなされるべきものであるから、全体の自由と云うものは得らるべきものではないが、その中に、子供の感じる自由中に自由感の無い自由と云うのがある。退屈、即ち之である。

自由感を持たせる為には、

2、設備の方面から考える事が必要なり。

人間の気持ちは、その置かれてある場所の設備で支配される。

自分で、自己の心を統制、整理出来る大人には大切でもないが、子供は実に左右される。

① 広い事

② 明るい事

が望ましい

③ 又室外を尊重する事。

。教育上の設備は、本来、学校本位にしていたので、校舎の設備にのみ留意していた傾向がある。

。室外を尊重する理由が、専ら健康上の事でのみなされている事がある。健康の為に、外を尊重するのは非常によい事には違ひはない。

幼稚園に於いて、庭を尊重するのは、幼児に自由感を充分に持たせる為の他の理由があるからである。故に明るい、広い庭を要する。

自由感の純真なものを起こさしむる為には、出来る限り、自然のままの環境に置く事が必要。之が自由感の上に主要な関係がある。戸外に於いて感じる自由感は、健康の為以外にも実に有意義である。

人為的に楽しくさせられるのとは、全然異なる。庭は全力を以て自然的に作るべきものである。

但し、以上の三点には、各制限のあるものである。

子供が自分の要求を満たし得る場所であると云う条件が重要なのである。

子供が自己の自由を如何に実現すべきかに就いて、非常に考えなくてはならぬ。無制限なものであってはならぬ。

自分を妨げる何者もない。併し、自分を満たしてくれるものは何一つない。之ではいけない。

設備に余分に手をかけてあれば、設備に追われて子供は、活動させられる。

自己を充分に發揮して生活する事を、設備が助ける様な程度でなくてはならぬ。

幼稚園とは、その幼児の年齢に適切なる自由感を与える設備である。

都会に於いては、何でもない普通のものを得るのに消費する。

併し、田舎に於いては、特別な物を得るのに消費させられる。

II、仕組み

幼稚園全体の仕組みから出るものは、生活形態であ

る。自由感はこの仕組みによっても大いに左右される。仕組みの上から窮屈な感じを子供に与えぬ様にする。

自由感の充分に与えられる様な仕組みが欲しい。そのゆるみ、固さは、程度等で現せるものではない。形でもない。

之は保育をされていると云う意識を感じない様な仕組みが欲しい。

子供が仕組みの中に入れていると、意識しているか否か、先生の教育を意識しているか否か。

先生は全力を以て、子供を自由にすべきではあるが、子供は自分が先生に依って自由にさせられているのである等と感じては、不本意である。

この意識を、被教育特殊意識と云う。

自由とは外形のものではなくて、その人の内に入って見なければならぬ。

〃仕事と遊び〃

仕事とはしなければならぬと義務づけられていることを意識しつつやる。

遊びは、意識よりも生活の事実が先になっているのである。この仕事と遊びとの違いを論じる事によって、古くから被教育意識は扱われて来ている。

幼稚園とは、実際としては、遊戯が本体であった。けれど仕事もある。が、その仕組みがこの意識を感じさせぬものであったなら良いのである。

この意識は、次の様な場合に出る。

① 上から強く抑えられている場合

② 他は義務を口にして改めて意識さす。

③ おだて上げる事によって、義務をも、又意識をも自由感でなしているように、カムフラージする事ができる。

「我が物と思えば軽し傘の雪」

おだてるのは、自由感を起こさしむる事は事実だが、之は一時的のものである。真実に自由感を起こさしむる様にする実際の事としては、

幼稚園の実際として仕組みとしての中に、課業は無いのである。

幼児に業を課するには、弾力的態度を取るより他に方法はない。課業と云う気持ちで仕組みを行っているのは、自由感を起さしむる事は出来ない。

課業とは学課を課するものである。幼稚園には学課が無い。故に課業は無い。

学校では学課として課する事が仕組みの本体なのであるが、幼稚園に於いては課業の気持ちを持つ事すら許されない。

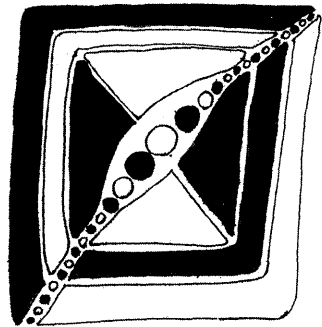
幼稚園の中に、稽古と遊びの区別が出来るものだろうか。

遊びとは自然的なものである。幼稚園の中には、課業もないと同様に、稽古と云うものもない。

稽古とは本当の生活が彼方にあり、そこへ行く迄の道程なのである。

幼児が何をすると、その動作に表れたる真実なる生活を見なければならぬ。

稽古を一心こめて出来るという事は、本式にする時の為にするのである。即ち飯の事をなすに一心に出来るの



は、本当の時あるが故である。

人生には一時たりとも飯の事はない。そんな意識も持たずして生活させよ。

生活の形式の自由さは疑われる。絶対の自由と言えば、却って放任であって、それを或る程度の制限を加える。これ仕組みである。

課業、稽古ともに意識を抱かせる。又、之供に飯の生

活である。幼稚園に於いては、真の生活をさせ度い。

真の生活の起こりは、又、如何なる条件？

先ず仮の生活たるものは、その特色の主なる一として、

① 極めて偶然的な、或いは人為的なもので、その人に於いて何等の必然性を持たざる条件の下に行う。之は仮であるが故に、生徒は自分のなす事を知らぬ。予め時間割は定められてはいるのだが。

② その事に於いても亦、必然的な条件の下におかれていない。即ち己の今持つところの目的と結びつけてやるのではない。

その事を稽古とせず時は、必然的な条件の下になされていない。今持つところの目的とかんげいない。やがて何れ後に斯様な目的を持つ事もあろうかと、稽古するのであって今の目的ではない。

故に真の生活とは、その人その事が今の目的に於いて必然の関係がある。一般の学校に於いては、今は切迫性が乏しい。一般の社会人に見る様な真剣性が足りない。

即ち

1、生活そのものが、その人の興味に結び付けられている時は、その生活が真の生活である。真の生活は、中から興味湧くのである。その興味は、時、人、場所の境遇に依って異なる。

一般に云う教授法の巧みさというものは、仮の生活の中に入るべき。

課業、稽古を真の生活たらしむる為には、又必然的なものにする為には、それを生徒の興味と結びつけ様と努力するところより起る。

併し、幼稚園に於いては、その生活そのものから油然而と興味の湧き出るところのもでなければならぬ。

2、又真の生活は、その目的が今の目的と一致するものでなければならぬ。即ち目的でなくてはならぬ。現在の興味に依り、今の目的に結びついていなければならぬ。

以上の二つに依って、生活の必然性を得られる。併し斯様に厳密なものではないが、幼児の遊んでいる時に



は、この通りなのである。

以上に出て来た仕組みを一般に、幼稚園に於て保育案と言っている。

従前に於いては、保育項目の配列、羅列であった。配列そのものも大なる苦心のあった事だろう。殊に、その保育項目の要目に於いては、子供の興味を考慮した事は勿論であった。

その古い方法に対して、今まで考えて来た仕組みの原則よりすれば、むしろ興味を先に、保育案を立てて、此に項目を配当する。

興味が真の本体として項目を配当する。

1、興味を本体として案をたてるなら、おそらく季節と行事が入って来る。

行事の中には、広くは社会的なものより、狭くはその学校当局のものもあろう。子供を取り囲む生活の年中行事である。

幼稚園に於いて、季節、行事は一年を通して、つまびらかにせねばならぬ。

各園は各々自分の園の季節的な移り変わり、又、行事を基礎とせねばならぬ。そしてその基礎の上に保育項目を、なるべく偏しない様に配当するのである。

行事、季節の上の生活的興味を利用して、真の自然の興味を子供の中に起こさしめて、必然的の最も真実なる生活をなさしむる様な保育案を季節、行事を主体として考える。

子供でなくても、人の生活と云うものは、気候と行事に支配されている。

小学校に於いては学課と云うものがあり、その進歩の為に季節、行事にばかり拘っていられぬ。だから学課をば生活的興味を起さしめる為、行事、季節を考慮する教授法が用いられるが、幼稚園に於いては生活興味を利用するのではなく、それを本体としてやっていく。

生活興味の満ちあふれている子供の生活を充実し、中身を一杯にする案を考えねばならぬ。但し、この二つのみによってなされた保育は、原始生活に於けるもので、近代の文化生活に於いては他をも考えねばならぬ。

それ等は変化の多いものである。又、人間生活に仕事がある。

例えば、商売、学校、旅行等、社会施設であつて、季節、行事に支配される事が少なくない。殊に文明生活に於いては少なくない。企画されて行われているものである。故に人間生活の中心となつている様々な企画を本としてなされる。

2、企画の特色としては、それぞれ目的を持っているが、その場合その目的が或いは、そのやつていく道程の動きに、子供が興味を持っているのかは分からぬ。子供が如何に興味を持つかは、目的と云う事から考え得る。前者は斯う考えたらこじつけである。全ての企画の有する目的の力を借りて、それを本として保育方案を作る。之をプロジェクトに依る保育案と名付く。目的性を基礎とされねばならぬ。

前者のは移り変わりがあるが、後者は目的が本体なる故に、その到達される迄は、経統される。

子供に継続せる興味を抱かせねばならぬ。

おもちゃ屋をプロジェクトとして作る。子供は、その屋台に気を引かれるか、その売り買いに心を引かれるかは、わからぬ。おもちゃ屋と云うプロジェクトの中で、保育項目を凡てさせるのである。

季節行事よりも、却つて目的を本体とした保育の方が新しい。

## 第五章 保育項目

保育項目は、方案の根本となるべきものである。

幼稚園に於いては、決して項目が主でなくて、保育の為の項目である。

一つ一つとして児童文学、児童芸術として、又、児童科学として、それぞれ立派な文化的存在をもつて研究されているのである。

幼児教育者は、いくらでも研究しうる。

昔に於いては、項目が幼稚園を支配するかの如くに見えた。今日に於いては項目を表立てずに、あくまで保育

を主として幼稚園があるのである。

組織されているものの一つ一つに重きを置くより、保育全体を主として幼稚園をやっていくのである。

現代保育の重要点は、ここにある。子供に絵を画かすにも、保育生活の一項目としてなされる。児童芸術ともされて、いくらでも研究しうる。

### 一、製作（手技）

手技とは作る事であるが、この製作と云うことを、教育的に重んじて来たのは、フレイベルの幼稚園の一つの卓見である。

併もその後に至り、その意識は、深く、強く主張されて来、現代教育に於いては、作業に依る、又勤労に依る教育等と云われている。

主張は、皆その根本に於いて合致しているものである。

而して製作という事が卓見であるという事が、古い教育が専ら、受け取らせる事、及び観念的なる事に限られ

ていたのに対し、生活を生み出す事、観念よりも実体的なる事に、重きを置くところにある。

この意味に於いて、手技は、フレイベルの時代にも、今日に於いても幼稚園らしいものの一つである。而も亦これ程（手技）フレイベル以来、大なる変遷を経たものはない。

今日に於いて手技という字をさけて、製作と云う文字を用うるを欲している事も、その現れである。而してフレイベルは、作ると云う教育の真価を良く理解していたのであるけれども、二つの点に於いて誤りを犯していたのである。

1、その一つは、折角観念的でなく実体的であるべき、この教育に於いて実体に徹底せず、抽象の域を脱しなかつた。何故なれば、その時代、及び彼自身の個性の影響により、彼の教育が象徴的であつたからである。

### Symbolic

○ 所謂恩物は、その考えを代表するものである。

2、第二は、作ると云う事の生活的意義に対して、技能

的意義のある事は勿論であるが、当時の教育思想の程度に於いては、その技能的方面が尊重され、作る事そのことよりも作り方そのものに傾く所があった。フレーベルの時は、それ程甚だしくなかつたが、後に甚だしくなり、幼稚園の一次点とさえなるに至つた。その結果、幼稚園に於ける手技は、技巧的となり、練習的となり、分解的となり、繊細的となり、作ると云う事の生活的意義から全く離れたのみならず、幼児の能力、殊に神経の不適当なる時に与えようとする有害なるものにさえなつた。

手の技術にあらずして、製作そのものでありたいのである。

作る事そのものは、観念ではなくて、実際である。フレーベルは、作る事としては良くやって来たが、観念的から實際的に移るに至つては、徹底していなかつた。その現れの一つが恩物である。

之は、フレーベルが子供を遊ばせる道具の一つとして、彼が考えだしたものの、言わば一種の玩具である。

が、彼にとっては普通一般にある玩具とは相違して、恩物の中に深い意義（味）がある。

云いかえれば、子供が玩具として遊んでいる間に、彼が子供に与え様とする深い宇宙の原理が、象徴的に伝えられるのである。

斯様ないわれから、Cave（Gift）と云われている。

恵みもの、賜物と云つていたのである。

例えば、恩物の中に積木がある。色々と切られている形が、立方体の箱に入れられている。

この恩物は、箱におさめては、又ばらばらに解くと云うわけなのだが、それだけである。（第四恩物）が彼は、総合と分解の原理を簡單なる玩具の中に象徴的に含めていたのである。

明らかに云わずに、裏に偉大な原理を隠しておいて、何となく会得させ様とさすのである。

露骨に云つたのでは、却つて会得できないから、何物かに託して分かせ様とする。

又、第一恩物に六球と云うのがある。「まり」であるのに、宇宙の円満なる事を出した。

実にどれも意味深長なものである。

然るに、決して実体徹底せず、観念的、象徴的主義を取ったため欠点があり、あくまで彼を尊重する我々も、今は幼稚園に於いて、恩物を取り去る様になってしまったのである。

製作に二要素がある。

一に云えば、人格的活力である。製作者は、作ろうと云う意志を以て、全心を集中さす。が、意志のみで作るわけではなく、中樞から末端に至る神経の力によらねばならぬ。

斯様に人格的、生活的なる事と、神経的なるもの。教育的に考えれば、前者の方が重要である。

徒らに技巧にのみ捕われ、必ずしもすぐれた技巧に重きをおく事ではない。

作ろうとする心の動く事、作ろうとする心を生活的に実現さす事、作ってより満足を味わう事、之を主体とす

る。

作ろうとする生活力を養い、実現させていく力を養い、作ろうと思つたものをなし得た意志的満足を味わわせる、之生活教育である。

フレーベルは、之を意に容れたのではあるが、やはり徹底せず、技巧に流れてしまった。

器用、技巧に重きをおく弊は、弟子に依り、余計激しくなつた。

魂の真価を見ずに、手先を見易い。

技巧を考えるには、練習がある。然し、幼稚園には仮の稽古と云うものは無い筈である。稽古の為に作ると云う意味で、技巧を考えたのでは駄目である。

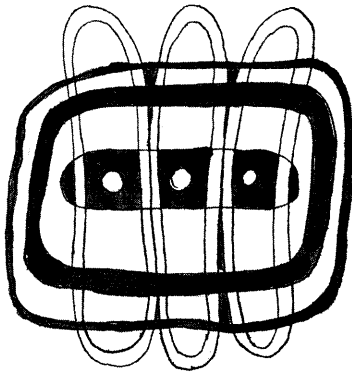
今日では、生活的意味から製作を考えている。昔に於いて、技巧主義なるが故に、殊に手技に於いて練習をやかましく云われたものである。物を作ろうとするには、全体でやってゆく。そして子供は満足である。が、昔は手技を分解的にすべてさせたものだった。切り方、貼り

方、折りかた、等に分析して練習をさせ、而して後、何物かに手をふれさすのである。

作ると云う混然たる生活の中に、全体を入れてやらせてゆくべきである。

フレーベルのやり方は（gift and occupation）という様な作業であった。

保育項目に相似せるものは、家庭に於いても、なされているに違いはない。が、幼稚園に於いて初めて教育的



指導のテクニックが生まれて来るのである。

作ると云う生活的意義を無視して、技巧に捕われ練習し、分解し、抽象的になり、子供にとっては、

- ① 本当の意味の面白さを味わう事が出来ない
- ② 保育原理の一たる具体原理に逆らう事にもなり
- ③ 又、小さな部分の技巧は、子供にとって神経を疲れさすものである。

筋肉の発達は、大きな部分より始まり、後に末端に至るものであるから、小さな手技と云う事は実に不合理な事である。

保育の本質に逆らうのみでなく、子供の健全なる発達に有害なものである。

幼稚園の手技は、小さく成り易い。という論が、殊にアメリカに於いて唱えられて来た。殊に幼稚園に於ける織紙の織り方等、細かいもので、又、抽象的に美しい対照的の美しさであって、くずれ、くただけると云う事が無い。

この美麗式と云う昔の幼稚園で唱えられたもので、フ

レーベルが言った語で、成立、組織と云う事に就いて、はつきりとした観念を子供に与えると云う事であった。此は細かく対照的に美しくするのが要点であるのだから、実に不自然なものであった。

もっと酷いのに至っては、針通しがある。この練習主義・分解主義が斯くさせたのである。

幼稚園に於ける女性主義の弊害が、ここにも一つ現れていると云うべきである。

この二つは云うに及ばず、レーベルの積木の恩物でさえもひどく小さいものである。

ここに主にスタンレーホール一派が非難し、繊細主義を脱せしめようとした。

作業行程上に分解的であるばかりでなく、紙、木、粘土等と物にこだわっている傾向もあった。昔の幼稚園に於いて言われたのは、紙細工、粘土細工等である。紙の細工に於いては、紙のみを、粘土の時は粘土ばかりを用いる。

① この様な中で作ると云う生活を尊重する為には、細

かくと云うのを、大まかでもかまわぬとする。

繊細が生活から離れるに對して、粗大を許す事は、生活に引き入れられる事なのである。

② 又、細工の材料を限定する必要はない。すべての材料を混合して用いるがよい。

粗大主義、及び材料合併主義を採って行き度いものである。併し、この二つは生活的にならうとするもの、妨害物を除いたもので、生活的にする要素とまでの積極的な意味は無い。

作ると云う事自身としては、粗大で許さるべきものではない。

之が根本ではあるが、幼稚園に於いて、それに捕われているは生活と離れてしまうから、之を主意にする事は出来ない。

幼児の作品は、よほど原始芸術に相似している。巧妙、器用、繊細、等に捕らわれていないからこそ、大胆で伸び伸びとした生命の躍動が見られるのである。

故に生活的になす為には、粗大でなければならぬ。

又、練習の爲には、分解的、限定的になる。生活に練習はない。だから道具も材料も限定、分離せずに合併混用する。

以上の二主義によって、手技を生活的にする妨げをするものを消極的に除くのみである。

幼児に規則、限定を要求する事は生活的に障害を来す。故にその事は仕方のない事として黙許する事になる。

○ 幼児の製作、手技を生活的ならしむるに、積極的な手段を考えねばならぬ。

製作と云う事は、作らせられる事ではなくて、人類生活の中にあるのである。人為的なものではなくて、人間としての生活の中に作らなくては、いられない様な気持ちで作るのである。

人生には、作る事ばかりであるが、それには多く凡てが目的がある。文化生活はこんなものである。

人類生活の中の製作は斯様なものであるが、子供の生活的製作は、芸術的、及び産業的発動から起こるもの

で、体育的、況んや教育的製作であってはならない。

吾々の製作の中には、産業的必要の切迫を感じていないものが少なくない。

幼稚園の子供に、製作を生活的にする爲に、産業的、芸術的動機から、子供が自分から作る様なものにした

い。この事が、吾々の幼稚園に於ける手技の根本政策である。

ここに、芸術的誘導と、産業的誘導がある。が、この二つは、共に目的の方からいっているのではない。芸術を作り度いと思うのは、人間本来の望みである。生命は外面に表れるものである。

幼児の生命も、一つは単なる活動として表れ、他の一つとしては、単なる活動としてではなくて、或る一つの表現をしようとするものである。

——以下次号——

(川村女子短期大学)